

奨励研究 研究報告書

研究課題

近代茶道の地域的展開

「福岡・南坊流の場合」

京都造形芸術大学大学院芸術研究科（通信教育）

篠原 佐和子

研究実績の概要

本研究は、明治期の福岡市周辺における南坊流（南方流）の展開を、地域の茶道受容者という点から考察するものである。その第一歩として、南坊流の教授者である立花有得（一八〇六・一八九三。遊、無心庵）を中心に、彼の茶の湯の特徴とその門人を、主に福岡市博物館寄託資料と関連資料から調査した。その結果、彼の茶の湯は保守的・復古的でありつつも、時流を敏感にとらえていたと考察した。また、これまで知られていなかった、多様な門人の発掘に一定の成果をあげ、南坊流の受容と継承の様相をより明らかにできたと考えている。なお本研究の成果は、平成三十年度茶の湯文化学会東京例会において「立花有得と福岡の南坊流」と題して発表し（平成三十一年二月十六日、根津美術館）、今後の考察に向けた示唆を得ることができた。

研究目的

文明開化期に、茶の湯をはじめとする伝統文化が衰退したことは、しばしば言及されるが、各地域には今日も多様な中小流派が存続しており、茶の湯の継承の一翼を各地域が担っていた可能性が指摘できる。その実態を明らかにすることは、近代茶道史の課題のひとつである。本研究は、福岡の南坊流の教授者・立花有得に焦点をあて、この課題を考察した。

元禄期の筑前で誕生した南坊流は、家元制や藩の茶頭職と一線を画し、継承の主体には地域文化人が想定される。その教授者である福岡藩士の立花有得は、「南坊流茶書の収集と門弟の薫育に尽くした」「人物として知られているものの、近代茶道史のなかで十分に検討されていない。このような背景により、本研究は①立花有得はどのような茶の湯を行い、②どのような人びとがそれを受容していたのか、という二点の考察を具体的な目的とした。

研究方法

立花有得の旧蔵とみられる立花家資料は、計百十六点が福岡市博物館に寄託されている。また、同館には、立花有得に師事した浅嶋素濤の旧蔵とみられる資料も四十四点寄託されている。これらのうち近代資料を中心に、本研究で必要となる文献資料の調査を行った。この他、松岡博和などの研究によって、立花有得が関わった「宗啓禅師之碑」および「利休居士三百年紀念碑」が知られており、これら石碑の实地調査から、建碑者の名前を収集した。これらにより収集した名前は、分限帳、人名簿、職員録等の他、新聞記事に加え、寺院や旧家での聞き取り等を交え、人物の特定や事跡の発掘を行った。

研究対象の概要

立花有得及び南坊流の概要を次に確認しておく。

立花有得の家は、立花実山の伯父重興の三男、重貫に始まる分家である。代々、馬廻組であり、立花家の一門の中では、石高も五三〇石と高くはない。しかし一七六四年（延享元）から一八七〇年（明治三）まで、百年以上にわたって石高はほぼ一定であり、屋敷も継続して因幡町（現在の福岡市中央区天神）である。一九〇四年（明治三十七）の所得税納税者一覧でも、有得の家は因幡町にある。有得の経済状況は詳らかでないが、発展する福岡の中心付近に住み続けており、廃藩後の困難な中にも、打撃は比較的限定的だったと考えられた。

南坊流は、立花実山が『南方録』にもとづく茶の湯を実践し、元禄期の筑前で誕生した流派である。やがて江戸に伝わり、江戸では藩主や旗本、住職らに広まっている。一方の筑前では、立花家を中心とした福岡藩士によって受継がれ、明和の頃に流布した所伝がある。しかし、継承の枠組みはなく、天保期に一時途絶えてしまった。それを惜しんだ江戸詰の福岡藩士・櫛橋雪心は、江戸で皆伝を得て、筑前に南坊流を再興した。立花有得は、その筑前再興後の門人である。

研究成果

(一) 立花有得の茶の湯

皆伝後の立花有得は、江戸の南坊流と『南方録』の相違に気づき、筑前の南坊流の復活に注力したことは知られていた。『南方録』の茶の湯と、筑前の南坊流を混同している認識が、立花有得にどれだけあったのか分からないが、本研究では、文献資料の考察を進め、有得が系譜の上で、立花家本家の立花樹軒(二七四〇・一八二二)を師としていることに着目した。立花樹軒は筑前に伝わる『南方録』の注釈書類から、『南派茶伝類聚』十五巻を編纂しており、有得はこれに影響を受けたと考えられる。また門人によると、有得は「宝暦の旧業に復せん事を企て」たという。そのような立花有得の茶の湯は、復古的で、近世との連続性にこだわる保守的なものであった。

しかし保守的な有得の茶の湯は、旧態依然としたものではなかった。一八八二年(明治十五)、筑前の故事にもとづき、門人と共に、利休忌の献茶と、古跡釜掛松での柴火会(野点)を再開していることに着目した。古跡釜掛松とは、天正十五年六月、豊臣秀吉の島津討伐に同行した千利休が、箱崎松原で柴火会を行ったと『南方録』にある場所である。献茶と柴火会は真と草の対極にあるが、茶室の外に、茶の湯を持ち出そうとする点で共通している。北野神社での献茶の公開や、麴町公園に開設された会員制の星岡茶寮を挙げるまでもなく、公共の場に茶の湯を持ち出すのは、近代に共通して見られる傾向である。釜掛松での柴火会は、古跡顕彰の側面も持つ。有得はあくまで筑前の故事にもとづきながら、きわめて近代の流行をとらえた活動をしていたと言える。

このように、立花有得の茶の湯は、筑前に伝わる『南方録』関係の茶書や故事にもとづき保守的でありながらも、文明開化で変貌する福岡の中心地で、門人たちと共に、時代の変化に敏感に適応していたことを、本研究では明らかにした。

(二) 立花有得の門人

立花有得から皆伝を得た八名の人物像を把握すべく、文献調査や聞き取り調査を進めた。その結果、これまで知られていなかった皆伝者の職業や居住地、年齢等が断片的だが分かってきた。彼らは立花家の一門、近隣の藩士仲間、進取の商人や、博多の塔頭の住職、退役軍人等であり、わずか八名ではあるが、多様な人物であった。また後述する『相伝人名簿』との照合により、彼らが皆伝を得た年月日、皆伝時の年齢のほか、人によつては、皆伝前の相伝段階である「初奥」や「中奥」を得た年月日も判明し、彼らの人生の諸段階に茶の湯を位置づけることが可能となった。

浅嶋素濤の旧蔵とみられる『相伝人名簿』は、一八六二年(文久二)から一九〇二年(明治三十五)まで四十一年間にわたる、立花有得とその高弟三名から相伝を受けた門人の名簿である。のべ百十二名(実数八十六名)の相伝年月日、相伝段階と相伝者名が記されていた。これを用いて有得門下の相伝人数の推移を分析した。明治六年から全く相伝が行われていない空白期間が六年に及び、有得門下にも維新期の衰退が見られたものの、その空白期間も一部の門人は皆伝に向けて稽古を続けており、減少しているのは新規の門人であろうことが読み取れた。

更に皆伝者以外も調査を行った結果、これまで知られていなかった門人を発掘できた。例えば『南方録』を所持する立花家の本家の嫡子・立花増実は、福岡藩賈札事件の筆頭責任者として死罪となる一八七一年(明治四)の四年前に、立花有得から中奥を相伝されていた。その他の例を挙げると、維新後に廃祿者となった卒族や、立花実山が隠棲した博多住吉の松月庵の再興を主導した真言宗の住職、廢寮となっていた高取焼を再興し森長寮を開いた洋服商など、門人の活動歴も幾らか判明した。

有得から相伝を得た女性はずか六名であるが、特定できた四名は、揃って官界と繋がり

のある妻であることが留意された。福岡県知事・安場保和の次女で後藤新平の妻和子、九州鉄道社長で元農商務省商務局長・高橋新吉の妻鈴子、元工部省少書記官で何礼之の弟・何幸五の妻錦子、有得の五女で外務官僚・鶴原定吉の嫂重子である。

有得が相伝を与えた四十六名のうち、三十四名はこのように何らかの属性等が判明したが、多くが断片的な情報に留まった。よって暫定的な考察にはなるが、それでも、立花有得門下の南坊流の受容者として浮かび上がる集団があった。①立花家の一門 ②近隣の藩士 ③博多の仏僧 ④福岡の商人 ⑤官僚等の妻 である。特に仏僧に相伝を与えるのと同時に、有得は献茶を再興しており、師弟が相互に感化しあっていた様子がうかがえた。しかしその後は、立花有得から相伝を得る門人は、再び近隣の人びとや親類が中心となる。有得の住む因幡町は、明治九年に県庁が天神町に移転してからは官庁街となり、近隣は開化で発展し変貌していく。このように見ていくと、立花有得の門人は、血縁や地縁を基本として、福岡の発展に伴い多様化しており、流派の觀念形態ゆえに集まった様子はないと考察した。立花有得の茶の湯には、多様な立場や考えの門人を受け入れる柔軟性があり、それが文明開化期における福岡の南坊流の継承と展開をもたらしたと考えられた。

今後の展望

本研究課題では、立花有得が関わった二つの石碑の建碑者の名前も収集し調査をしたが、それぞれの集団は、立花有得を中心に重なり合う部分がありながらも、異なる性質を持つもののように思われた。石碑の性格や有得らが果たした役割を明らかにするには、地域社会にも視野を広げた考察が必要となるだろう。福岡の南坊流の門人にとって、南坊流は所与の地域文化として受容されたという着想のもと、地域文化の視点から近代における茶の湯の変容と連続性を考察したいと考えている。

〔謝辞〕

本研究を進めるにあたり、京都造形芸術大学大学院芸術研究科（通信教育）修士課程の指導教員として、准教授・井上治先生にご指導をいただいた。また資料調査にあたっては、所蔵者及び福岡市博物館にお世話になった。ここに深謝の意を表す。

¹ 『新版茶道大辞典』淡交社、二〇一〇年、「立花有得」の項。

² 津田蕪山「喫茶南方流伝統」（龍淵環洲『禅茶録 其の二』茶道南方流南方会、一九七〇年、二〇九頁に所収）。